

第六節 高機能自閉症(HFA)の行動特徴と支援

1. 高機能自閉症

高機能自閉症(HFA: high-functioning autism)は、自閉症の診断基準を満たす人のうち、知的障害を伴わない人たちを意味しています。知的障害を伴わないことの目安は、一般にIQ70以上とされます。したがって、知的障害養護学校に高機能自閉症の子どもが在籍することは基本的にありません。しかし、今後は教育相談や巡回相談の対象児として出会うことが多いと予想され、知的障害養護学校の教員にも十分な知識と対応方法が求められています。文部科学省の「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」(2003年)では、高機能自閉症の判断基準として、表1に示したものが挙げられています。

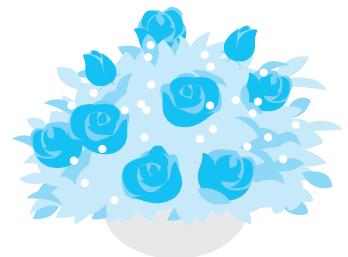
高機能自閉症と類似した行動特徴は、アスペルガー障害や高機能広汎性発達障害(特定不能)にも見られ、同じような支援が必要となります。ただし、アスペルガー障害の場合には、乳幼児期に顕著な言語発達の遅れが認められない点が自閉症と異なり、また、高機能広汎性発達障害(特定不能)の場合には、自閉症に類似した行動特徴はあるものの、自閉症の診断基準を満たすほどではない、という違いがあります。

留意すべきことは、高機能自閉症には「平均以上の知的機能を持つ人」と「境界線レベルの知的機能を持つ人」が含まれていることです。境界線レベル(IQの目安として70~84)の知的機能を持つ人の場合は、教科学習や社会的スキルの習得が十分進まず、その面での支援が必要になることも少なくありません。

2. 教科学習の特徴と支援

知的障害がないということは、様々な面についての学習能力があることを意味しており、一般に教科学習においてはかなりの能力を発揮する人もめずらしくありません。しかし、新しい学習内容に入ったり、新しい計算方法を学習する場合に、前に覚えた内容や方法にこだわって、新しい内容や方法への転換が難しかったりします。知識の記憶、漢字の読み書き、四則計算などはよくできるのに、文章の内容を答える問題や作文、算数の文章題が苦手なことが一般的です。対象児のつまづいているところを明らかにしたり、本人の思考様式(問題をどのようにとらえて、どのように解決しようとしてるか)を理解しながら個別的な指導を行なうことが必要になります。文章の読解についても、内容を描いた絵を参考にさせたり、文章を分解してその構造をわかりやすく示すなどの工夫が必要になります。

教科以外の面でも特定の事物に対して非常に詳しい知識を習得している人たちがいます。例えば、鉄道の路線や時刻表を詳細に覚えていたり、昆虫の種類や名前、その形を細部まで覚えていたり、車の車種を大人がびっくりするくらい詳しく知っている人もいます。これらの興味関心は単に特異な能力ととらえるだけでなく、趣味や余暇活動へと発展できるような配慮が必要です。



第六節 高機能自閉症(HFA)の行動特徴と支援

表1 高機能自閉症の判断基準

以下の基準に該当する場合は、教育的、心理学的、医学的な観点からの詳細な調査が必要である。

A. 知的発達の遅れが認められないこと。

B. 以下の項目に多く該当する

○ 人への反応やかかわりの乏しさ、社会的関係形成の困難さ

- ・ 友達と仲良くしたいという気持ちはあるけれど、友達関係をうまく築けない。
- ・ 友達のそばにはいるが、一人で遊んでいる。
- ・ 球技やゲームをする時、仲間と協力してプレーすることが考えられない。
- ・ いろいろな事を話すが、その時の状況や相手の感情、立場を理解しない。
- ・ 共感を得ることが難しい。
- ・ 周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言うってしまう。

○ 言葉の発達の遅れ

- ・ 含みのある言葉の本当の意味が分からず、表面的に言葉通りに受けとめてしまうことがある。
- ・ 会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある。

○ 興味や関心が狭く特定のものにこだわること

- ・ みんなから、「○○博士」「○○教授」と思われている(例：カレンダー博士)。
- ・ 他の子どもは興味がないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている。
- ・ 空想の世界(ファンタジー)に遊ぶことがあり、現実との切り替えが難しい場合がある。
- ・ 特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をきちんとは理解していない。
- ・ とても得意なことがある一方で、極端に苦手なものがある。
- ・ ある行動や考えに強くこだわることによって、簡単な日常の活動ができなくなることがある。
- ・ 自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる。

○ その他の高機能自閉症における特徴

- ・ 常識的な判断が難しいことがある。
- ・ 動作やジェスチャーがぎこちない。

C. 社会生活や学校生活に不適応が認められること。

「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」(文部科学省,2003)より抜粋

第六節 高機能自閉症(HFA)の行動特徴と支援

3. 対人関係の特徴と支援

高機能自閉症の人は知的障害を伴わないものの、自閉症という障害があることに変わりありません。対人関係の取り方の質的障害は自閉症の診断基準の柱の1つですが、高機能自閉症の人には、自分から対人関係のとれる人が少なくありません。しかし、対人関係の取り方が一方的であったり、相手の心情に配慮した関わりができなかったりします。例えば、自分の関心のある話題を一方的にしゃべったり、相手が傷つくようなことを平気でいったりするようなことがあります。ある中学生は、自由に会話をするといつもバドミントンの話になり、世界大会、日本選手権、さらには県大会の何年も前の試合結果を一生懸命話していました。ある小学生は初対面の人に向かって、「変な人」と何の悪気もなく言いました。

こうした社会的場面の認知の不適切さは、特に「心の理論の障害」として強調されています。「心の理論の障害」というのは、他者の心的状態（意図や感情状態など）の理解が困難なことを言います。私たちはその場の状況や前後関係、相手の素振りや表情を手がかりにして、相手の心の状態を推測しながら自分の行動を調整します。例えば、自分が話している話題が相手にとっては興味なさそうに感じた（相手がつまらなそうな表情を見せたので）ら、別の話題に変えるでしょうし、これを口にしたら相手が怒るようなことは、心の中で思っても口に出しはしないでしょう。ところが高機能自閉症の人は相手がどのように受け止めるかが理解できず、思ったことを口にしてしまい、相手との関係が気まずくなるようなことも少なくありません。しかも、どうして相手が気を悪くしたのかを理解できないことも少ないありません。このような対人関係のずれや後述のこだわりや特異的行動によって、クラスメートとの仲間関係の不調和が起りやすくなり、時にはいじめの対象になったりすることもあります。

対人関係を含めた社会的スキルの習得に向けた支援として、社会的スキル訓練やソーシャルストーリーを用いた方法が開発されています。学級参加を促進するために本人の興味関心を活かした係り活動を設定したり、クラスメートに対して対象児への関わり方を教えることも大切です。

4. 言語の特徴と支援

言語・コミュニケーション行動の質的障害については、高機能自閉症の人は会話が十分可能で、語彙も豊富で、しかも難しい言葉を知っていることも多く、一見して特別な問題がないように思われがちです。しかし、会話を続けていると言語理解や概念理解のずれを感じるのが少なくありません。単語を字義通りに理解したり、微妙なニュアンスの理解ができていなかったりします。ある高校生は頻繁に消費者相談センターに電話をかけていました。その理由を尋ねると、お小遣いが少ないこと、またその使い方について相談したかった、というのです。お金に関する相談だから「消費者相談」センターに電話をしてよいのだ、と判断していたのです。これは社会通念での「消費者相談」の概念理解とずれていますが、その高校生にはずれているという認識はなく、自分は何も問題になるようなことはしていないと思っていたのです。

また、言葉の理解だけでなく、その使い方のずれもよく見られます。発話の調子（プロソディ

第六節 高機能自閉症(HFA)の行動特徴と支援

一) が平坦であったり、独特なイントネーションを使ったりすることもよく見られ、また必要以上に丁寧に挨拶をする人もいます。

言語に関連して、認知のずれあるいは認知の歪みが見られることも少なくありません。自分が体験した出来事について自分独自の関連づけをしてしまい、誤った認識を作り上げてしまうのです。特に中学生以上の高機能自閉症の人たちは言語を豊富に持っていますので、自分の体験を言語的にまとめることができます。しかし、意味理解や関係づけに問題があるために、誤解や間違った認識をもってしまい、時には過剰な被害意識を持ってしまうような場合もあります。

本人の認識の仕方を理解しながら、誤った理解の仕方や関係づけは修正していく必要があります。そのためにはカウンセリング的な手法を用いながら、用語辞典、ソーシャルストーリー、対象となっている事物に関するパンフレットなど多様な材料を用いて本人が十分理解できるような方法を工夫する必要があります。



5. こだわりや特異な行動と支援

こだわりは高機能自閉症の人にもよく見られます。特定の領域に関心を持ち、その知識を深めるのもその1つです。また、いつもと同じ予定時間にこだわり、その時間を過ぎてても活動が始まらなると急に怒り出したりする人もいます。また、感覚の過敏性を持つ人もいます。ある小学生は音楽の時間のリコーダーの音が嫌いで教室にすることができず、その時だけ別室に行かせてもらっていました。別の小学生は学習ノートの表紙に描かれた特定のキャラクターの絵を見るとイライラしてしまい、隣の児童のノートを破ったりしました。こうした感覚的な過敏性は本人にとって大変嫌悪的なものですが、周囲の人にはわかりにくいものです。さらに、社会的状況の認識の弱さから、人前で平気で鼻くそをいじったりして、周囲の人の不評を買ったりすることもあります。

こだわりや感覚の過敏性による特異的な行動はすぐに改善することは一般に困難で、担任教師がその特性を把握した上で配慮する必要があります。また、本人の考えを聞きながら、少しずつ慣れていく方法を一緒に考えることもよいでしょう。社会的状況の認識の弱さによる特異的な行動は、周囲の人の受け止め方を話し合ったり、努力目標カードを一緒に作って、少しでも我慢できたら褒めていくといったやり方が有効な場合もあります。

6. 学齢期以外での特徴と支援

幼児期は症状が顕著に表れる時期です。保育所や幼稚園などで集団に入れないことが問題になったり、言語発達の遅れがある場合には、周囲の人には原因がよくわからないのにちょっとしたことで奇声を上げたり何回もパニックを起こしたりします。その背景には認知能力の偏りや感覚の過敏性やこだわりがあることが多く、対象幼児一人一人の特性を見極めた上で、できるだけ対象幼児にとってわかりやすい環境作りと刺激の整理が必要となります。

第六節 高機能自閉症(HFA)の行動特徴と支援

アスペルガー障害の場合は、言葉は十分に話せ、時には年齢不相応な難しい言葉を話したりするのですが、同様に集団参加が苦手で、熱心に取り組む活動と全く参加しない活動がはっきりし、マイペースで行動しているように見えることが多くあります。

幼稚園教諭や保育士の場合、高機能自閉症について十分な知識を持っている人は少ないのが現状です。行動の背景にある障害特性を十分理解できるような支援が必要となります。さらに、幼児期には発達のアンバランスさが顕著に表れる場合もあり、就学時までには自閉症の症状が改善する事例もまれにあることも知っておく必要があります。

一方、思春期・青年期になると、本人の障害の自己認知が重要な課題となります。周囲の人たちとの人間関係がうまくいかないことや、特異的な行動について悩んだりすることも少なくありません。また、学校を卒業した後の社会人としての生活の中で挫折体験を重ねてしまうこともあります。そのような場合にはカウンセリング的な手法を取りながら、具体的な助言や励ましが有効である場合が少なくありません。

自閉症という障害は、生涯にわたって何らかの支援が必要となることが多く、その場合には本人自身が自分の障害に対する正しい理解を持ち、支援を積極的に受けれるようになることが大切です。障害の診断、告知、フォローアップについては、専門医や保護者と十分な話し合いを持ちながら進めていく必要があります。

7. 保護者への支援

高機能自閉症は時には周囲の人に障害として気づかれない場合もあります。保護者や教師は少し変わったところのある子どもだとは認識していても、自閉症という障害がその背景にあることに気づかないことがあります。そして思春期や青年期になって問題行動や挫折体験によって専門医を受診し、初めて診断を受ける事例もあります。対象児の障害特性をふまえた育児・保育・教育を行うためには、保護者がその障害を正しく理解することは何よりも大切であり、早期に保護者が専門家に相談できるような支援体制作りが必要です。

